

# 箱のなか

緋色

# 涼虫の平日

---

飴

---

工作中、ときどき飴を食べる。

それは儀式に似ている。たとえば仕事との隙間をつくるための。  
一瞬でも、どこか遠くまで自分を運ぶための。

パソコンのディスプレイの下に飴を一粒置く。赤い小袋に入った、いつもの味のものだ。

私はキーボードをたたきながら、ちらちらと飴を眺める。  
そして、飴を口の中に入れて頬の内側で転がすところを想像する。  
脳はその飴の味をよく知っているから、するすると再現をはじめめる。

飴は舌の上で唾液とからみ、ゆっくりと溶け出すだろう。  
その甘さとまろやかさは、私の中で固く結ばれた何かをそっとほどく。  
ああ、私はこんなふうに優しくされたかったんだ。陶然となりながら私は飴に身を委ねる...

ねえ、その封を切って、はやく

飴がふいに私を誘った。やわらかな低い声で。

私は飴をみつめる。

パッケージが心なしか淡く発光している。熱のようなものがちりちりと伝わってくる。  
ゆったりと妖艶に、飴は微笑む。

飴に手を伸ばしたとき、その熱に意思があることに気づく。  
私は飴にさとられないようにじっと目を凝らす。

飴には絶大な自信があるようだ。自分がすべてのひとを歓ばせる力を持っていると。

飴は真っ白な乾いた穴蔵へひとを誘い込む。思考を停止させ、  
さらさらとした砂の上に横たわらせる。周りには眠り込んでいるひとたちがいる。  
瞼を硬く閉じて、青白い顔をして。くたりと落ちた左手首には鈍色の鎖が繋がれている...

ごめんなさい、やめておくわ  
ふいに口から出た言葉に驚いたかのように、映像は目の前からぱっと消えた。

どうしたのよ  
飴はおもねるようなトーンでたずねる。こちらの顔をのぞきこむみたいに。

私は飴を手にとって、パッケージの表面をそっと人差し指でなぞる。  
飴と私はしばらく見つめ合う。沈黙が私たちをまるく包む。

封を切らないのね

飴はあきらめたように笑う。

その憂いを含んだ声がひどく懐かしいような気がして、  
ぐっと後ろ髪を引かれながらも飴を机に戻す。

そばを通りかかった同僚に、飴食べる？とたずねる。彼はにっこりと頷く。  
手渡すとき、飴はちら、と私をみた。

エンターキーが作る空白を見つめながら思う。

私はあの穴蔵から本当に出たかったのだろうか。

自分のすべてを手放して、うとうとと眠っているだけでいい、絶対的な支配の世界から。

左の手首を確かめると、鎖のあとがうっすらと残っている。（涼）

## ごはん道

---

### その2

---

妊婦生活も残すところあと少しという、9月に入ったばかりの頃だった。  
頭の右目と左目のちょうど真ん中らへん（秘かに私はその場所を頭の中の水平線と呼んでいる）  
に、つやつやとオレンジ色に光り輝く丸四角の「柿」がぼっかり現れた。

「柿」という果物は、それまで私にとって「あったら食べるけど、なければなくていい」  
果物で「何か盛り上がらない」果物だった。  
それが、突然、頭の水平線に現れ、体の中から自分とは無関係の触手が柿を求めて  
のたくり回っているみたいに「柿」が食べたくて食べたくて仕方がなくなった。

つやつやてらてらとしたプラスチックみたいな皮に包丁を入れると、カツンと種にぶつかる。  
包丁から手に柿を持ちかえて両手で割ると、渋色の細い筋が入った実の奥に茶色い種が見えた。  
その種をゆっくり慎重にはがすと、つるんとした半透明のぺっこりと凹んだ部分がある。  
そのつるんとした部分を人差し指の腹で撫でる。いつもいつも柿の皮を剥くと  
必ず行う儀式だった。

ひんやりとしたその部分に触れると毎日毎日「ああ」と嬉しくなった。  
その後、素早く皮を剥き大きな塊を口に押し込む。「あ～そうそうこれが食べたかったのよ」と  
毎日思った。  
柿が口を通って胃に落ちる間、どの部分に触れても「あ～そうそう、今日もあなたを  
待っていたのよ」と毎日思った。

子供を出産したのは大きな総合病院だった。  
出産が終わって最初の食事の時、トレーには小鯛を焼いたものが載っていた。  
お正月に使うような割り箸の上に「ご出産おめでとうございます」と書いてある  
赤い縁がついたカードが添えてあった。  
そして、そのカードの後ろに8分の1に切った「柿」が白い皿の上に2つ、  
行儀よく並んでいるのが見えた。

その時、私は柿を見て正直、嬉しくなかったのだ。  
あんなに全身を震わせるほど恋い焦がれていた柿は、もさもさとした「何か盛り上がらない」  
果物に戻っていた。

「ちま子さん、授乳の時間です～」その病院では2時間に1度、授乳の時間を知らせに  
看護婦が呼びにきた。看護婦に呼ばれると、ぺたりぺたりと薄明るい廊下を渡って  
授乳室に行った。  
授乳室は新生児室の向かい側にあった。新生児室で赤子を受け取り授乳室に入る。  
昨日まではここにいなかった存在をこうして手にしているのが不思議だった。  
その小さな存在の何もかもすべてが不思議だった。  
授乳室ではウィンウィンと空調が回る音と、体長30センチほどの赤子が

全身で乳を飲む音だけがした。

窓からは向かい側に建つビルが見えて、その窓ガラスがたまにキラキラと光って眩しかった。

何日目かの夕方の授乳時だった。

ぼんやりと外を眺めると、向かい側のガラス窓にまん丸くてオレンジ色に輝く「何か」が映っている。ガラス窓の上にじわじわと浮かび上がるかのごとくその「何か」は存在していた。

ウィンウィンと空調が回る音が聞こえる。

手の中には温かい小さな小さな塊が喉を震わせて乳を体内に取り込んでいた。

ガラス窓周辺は薄ピンク色に染まっていた。ああ、夕陽か、、しばらくその「何か」を見つめて、私はようやくわかった。

ガラス窓に映る夕陽はととてもとてもよく知っているものに見えた。

人差し指の腹がもぞもぞしてくる。

ガラス窓に映り込んだつるんとして半透明の夕陽は、私のよく知っている「何か」「何か」に似ている、、似ている、、呪文のようにその言葉が頭の中で回った。

「柿だ、、」言葉に出てくるより先に、あの種の裏側にある凹んだ部分が頭に浮かんだ。

あれから十何年経った今、やっぱり柿は「あってもなくてもいい果物」だけど、必ず季節になると1回は食べる。

そして、ひんやりとつややかなオレンジ色の皮に包まれた中身の奥に隠れている、あの半透明の小さな小さな夕陽の事を思う。

あの時、全身で乳を飲んでた小さな塊はもうすぐ私の背丈に追いつく。(ち)

## 涼虫の読書案内

---

「落下する夕方」江國香織（角川文庫）

---

十年ちかく一緒に暮らした男が突然、好きな女ができたから出ていくと言い出す。彼、健吾とその女は三日前に出会ったばかりだという。女の名は華子。

主人公の梨果があっけにとられているうちに健吾はいなくなる。がらんとした部屋で淡々と寝起きし、仕事に通う日々が過ぎていく。ある真夜中、突然梨果の部屋を華子が訪ねてくる。華子は、健吾の代わりにシェアメイトとして一緒に暮らしましょう、と提案する。

華子の存在は健吾とつながっていることだから、という理由ひとつで同居を決めた梨果だったけれど、意外なことに、華子との暮らしは心地のいいものだった。そっけないけれどからりと明るく、風通しのいい植物みたいな女。華子にはどうやら複数の男がいて、時折留守にすると律儀に断って出かけていく。そのこともごく自然なことのようで、梨香は手を振って見送る...

この物語は、片思いの物語だと思う。

華子とは気が合うんだ、男は皆一様に同じ事をいい、華子を好きになる。夢中になる。ずっと一緒にいたいと願う。そして男をとられた女さえも、いつのまにか巻き込まれてその魅力のなかに取り込まれる。でも当の華子は我関せずで、誰にも恋をしない。ふわりと正確に笑うだけだ。心は一ミリも揺らさずに。

華子の魅力はちょっとほかにはないタイプのもので、強く光っているのだけれど重量はほとんどない。風のように軽い。ひとが過去を積み重ね、そして未来に希望を託して今を生きているとしたら、彼女は連続した時間を持たない。未来に関心がなく、何かに、誰かに期待をしているそぶりもない。彼女が持つのは今という現実と、それから深い絶望だけなのだ。絶望を羽衣のようにまとった彼女は、遠い星のようにきらきらと輝いている。誰にも届かない場所で。絶望が持つ光は透明すぎて、哀しすぎて、ある種の人々は強く魅了されてしまうのかもしれない。

華子に惹かれる人々をみていると、恋は期待で成り立つもので、未来に向かわざるを得ないものなのだなどと改めて感じる。昨日より今日、今日より明日と。たとえ、相手が今しか持たない女であっても。つきあってるんだよね、好きだよ、と先の約束を取り付けたがる人々と華子とは前提が違いすぎる。敗北者たちはその狭間でくるくると哀しみのダンスを踊る。シンプルに、自分と華子の中で流れている時間の違いを理解すればいいだけなのだけど、

恋情と冷静な理解は相入れないものだ。

皆が華子を追う、追いながら困惑している。どうしてこんなことになっちゃったんだろう？

華子は蝶のようにひらひらと逃げていっただけだ。

つるりとしたきれいな顔にちょっといやそうな表情を浮かべて。

その構図は滑稽で哀しくて、愛おしいような気さえしてしまうのだ。

華子と一緒にいられる方法はひとつしかなくて、今に、この瞬間に留まるということ。

それだけしかないなんてなんだか悔しい。そして、そんなことができるひとは多分いない。

物語を追いながら、私もずっと華子と一緒にいたいと思っていた。

夏の屋台で一緒にたこ焼きを食べてビールを飲んだりしたい、

夕方の風がそよぐ中、くたりとソファで居眠りをしている姿をみていたいと。（涼）

涼

私ね、この冬生まれ  
て初めて「ネルシヤ  
ツデビユー」したん  
ですよ。

ち

ええええっ!! あんなに  
避けてたのに?

涼

そうなんです(笑)

ち

何かあつたんですか(驚)

涼

ダウンベストを買ったんで  
す。で、突然、中にネルシ  
ヤツを着てみたくなって、  
でもチエック初心者だから  
一番地味なネイビーと緑  
のを買ったんですよ。  
でね、着てみたら、すごく  
あつたかいです♥それと  
「なんか楽しくもう  
脱ぎたくない」み  
たいな、妙な安心感  
があるんです。

ち

面白い♪着てみないと  
わからないものなんですわ

涼

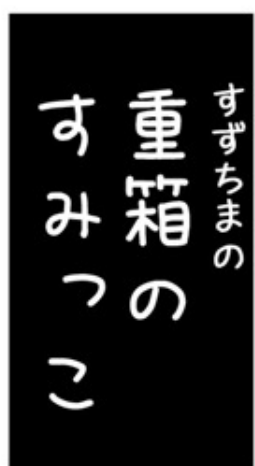
え(笑)

ち

もうその通りで。そして  
あの、モコモコつとし  
たネルの素材には  
チエック柄しかあり  
えないことに気がつい  
たんですよ。

ち

あゝそうかもそうかも♪  
チエック以外の柄ってなん  
かぱつとしないですよね  
ネルシヤツのふわつとした  
緩い感じとチエックってベ  
ストコンビなのかも。「なん  
か楽しくってそこなのかも  
しれないですね。」



涼

私、オシヤレという  
のは不安定な要  
素が大事だと思っ  
たのかもしれない。

ち

楽とは対極の。

涼

なんだろう…なんだろ

ち

う…何かそれ大事

涼

な気がするんだ

ち

けど…これからの課題

涼

にします(笑)涼虫さん、

ち

チエックとはこれでめでた

涼

く和解、ですか?

ち

うゝん、そうですね…

涼

(苦笑)

ち

できれば「交差しないで

涼

ほしい」ですが。

ち

あの…チエック柄

涼

には交差が必須

ち

ですよ(笑)

箱のなか (2014年冬号)



涼虫 (bellring64@gmail.com)

涼虫の読書案内HP

<http://bellring64book.blog.fc2.com/>

ちまちま子 (chimachima513@gmail.com)

ちまちま通信HP

<http://chimachimaletters132.blog.fc2.com/>

Copyright © すずちま All Rights Reserved



## ネットプリントのご案内

---

漫画も入った「箱のなか（緋色）」は、全国のファミリーマート、ローソン、サンクス、サークルKのネットプリントができるコピー機からプリントできます。

---

### プリント方法

- 1、お近くのネットプリントができるファミリーマート、ローソン、サンクス、サークルKに行く。  
わからない場合は<http://cvsmap.cvs-sds.com/CS/CC1948176406>で検索できます。
  - 2、コピー機で「ネットワークプリント」を選択する。
  - 3、ユーザー番号「MITJ52FGR6」を入力する。
  - 4、「箱のなか緋色号」を選択し、文章プリントを選択します。
  - 5、A3サイズになっているか確認後、プリントスタートボタンを押します。
  - 6、「箱のなか緋色号」がお手元に！！
- 半分に折って、そのまた半分の半分に折ると、、完成です！！

※申し訳ありませんが、コピー代20円のご負担をお願いします。

箱のなか 緋色

<http://p.booklog.jp/book/80639>

著者：すずちま企画

Twitter ID：suzuchima

制作者のHPは

(涼) 涼虫の読書案内：<http://bellring64book.blog.fc2.com/>

(ち) ちまちま通信：<http://chimachimaletters132.blog.fc2.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80639>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80639>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ